

圖說俳句大歲時記

新年



圖說俳句大歲時記

新年

角川書店版



図説 俳句大歳時記〈全五巻〉新年

昭和40年12月25日 初版発行

定価4800円

編者 角川書店
発行者 角川源義
写真製版所 株式会社 高木写真製版所
本文印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所

発行所 株式会社 ^{かど} ^{かわ} ^{しよ} ^{てん} 角川書店

東京都千代田区富士見町2の7
電話東京(265)7111(大代表)
振替口座東京195208番

© 1965 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします



1



2



4

- 1 かまくら
- 2 七福神舞
- 3 田遊び
- 4 もぐら打
- 5 雪祭
- 6 冬祭



3



5



6

春のことぶれ

―季節の芸能―

日本人の季節に対する感じかたの中で、注目したいのは、芸能によって新しい季節の到来を知るといふ感覚を、日本人が昔から身につけてきたことだ。

春の芸能 正月三日、家の中でくつろいでいると、表からのどかな鼓の音が聞こえて、「徳若に御万歳……」などという三河万歳の甲高い歌声が近づいてくる。

シートの冒頭に収めた「権現舞」の囃子は、岩手県のほぼ中央部かつて山伏修験者の根拠地として栄えた早池峰山麓に伝わる芸能だが、この地方では、毎年この権現舞が村の家々をたずねてくることで、春のおとずれを感じる習慣を身につけてきた。

権現舞の「権現」とは山伏修験者が奉ずる神の名で、昔、早池峰に拠った山伏が、獅子頭を権現の御神体と見なし、この獅子頭をいただいて霞（山伏の縄張り）の村々を例年暮れから正月にかけて巡回した。そして訪問先の家々の土間で、悪魔退散・幸運将来の祈禱の舞を舞って見せたのである。村の人々には、これが、年の夜に来訪する歳徳神のように思えたらしい。日本人には昔から、年の交差期に神が来臨し、人々に豊穡と幸を手えてくださるといふ信仰があり、この神の来訪を受けてはじめて、新しい年のしあわせを予期するという信心を持ち伝えていた。この信仰がたぶん、権現舞を受け入れる村人の心に働きかけたのであろう。早池峰周辺の人々は、やってくる権現の獅子頭を神とあがめ、獅子の舞を見、囃子を聞くことで、新春の到来を膚に感じとったのである。改まった言い方をすれば、村人にとって、権現の獅子は、「幸福を運ぶ神」であり、そのはなやかな笛・太鼓・鉦の音は、みちのくの農民に新春の到来をつげるいわば「春のことぶれ」であった。

一方、この季節、各地の農村で「田遊び」とか「田植え踊り」などといった農耕に関する芸能が行なわれた。

シートの二番めに収録した東京都板橋区徳丸本町の「田遊び」がその一例だが、ここでは例年二月十一日（もとは正月）、地元の農民が氏神の境内に集まり、太鼓を日置に見たてて、そのまわりで、苗代田の土ならし、代かき、種まき、鳥追い、田植え、田草取り、稲

刈り、米の倉入れ等々、一年間の農作業が順調に進んでめでたく豊作を迎えるまでの次第を歌とマイムによって模倣的に演じてみせる。農耕を始めるに当たって、あらかじめイネの順調に育つさまを演じておけば、田もそれに感染して、思いどおりの結果を生むに違いない、という心意から行なわれた芸能である。むずかしいいえば「感染の呪術」であり「感応の魔術」である。

シート三番めの「田植え踊り」は、東北地方に広く分布する芸能の一つだ。弥十郎とか久六などと呼ぶ音頭取りを先頭に、振袖姿の早乙女（少女が扮する）や囃子方の男が列を正して部落をまわり、各戸の庭で、田ならしから刈り入れまでの労働のさまを歌と踊りによって表現する。田遊びがマイムを中心にするのに対してこちらは踊りが中心で、民俗的には両者共通の基盤に立っているようだ。

夏の芸能 夏の季節の到来を感じさせるものの第一は、夏祭りの祭り囃子だろう。京都の祇園祭りに出る祇園囃子をはじめ大阪天満宮の天神祭りのだんじり囃子、尾張津島祭りの津島囃子、小倉祇園祭りの太鼓祇園等々……この時期演奏する囃子は不思議にダイナミックではなやかな雰囲気や響きで響いている。そして春の芸能には見られない、これら夏の音楽の特色は、鉦や太鼓などの打楽器がフルに活躍することだ。祭り囃子にかぎらず、この季節さかんに行なわれる雨請いや虫送りなどの行事でも、鉦や太鼓を主体とした激しいリズムの音楽が演奏される。これは夏祭りや雨請い、虫送りなどの行事が、主として天災や疫病の原因をなす悪霊や疫神を鎮送することに目的を置いたためで、荒々しい魂を持つ怨霊や疫神を村の外に追い払うにはなにより強烈な音響が効果あるものと信じられたのである。

一方、この夏の期間、農家では田植えを行なう。田植えはいまでは各農家別個に行なうことが慣例となったが、昔は、大田植えとか花田植え、囃田などといって、部落中の者が一定の日を定めて集団で行なったものである。シート四番めに収めた広島県大朝町新庄の「囃田」は、昔の田植えの風俗をいまに残す貴重な行事だ。ここでは、部落中の女が早乙女になり、青年たちのうちはやす音楽につれて、サンバイと呼ぶ者と歌のかけ合いをしながら田植えの作業を進める。サンバイとは田の神のことで、もともとこの囃田は、田の神を田に迎えてこれを饗応することを目的とした神事であった。だから早乙女とサンバイとの間でかわす歌は多分に田の神を賛美する気分がちりちりして、これが単なる作業促進の歌でないことをしのばせる。

秋の芸能 秋の芸能を代表するのは盆踊りである。東京あたりでは、新暦採用の関係で七月の暑いさなかに踊るから、なんとなく夏

の芸能のように思われるが、旧習を守る地方の農山漁村では、秋風の立つ八月の中・下旬あたりにこの盆踊りを踊る。シート五番めに収録したのは、東北地方の盆踊りの中でも特に名高い秋田県雄勝郡西馬音内町のそれだが、この踊りの特徴は、頭巾や笠で顔を隠した踊り子がおおぜい出ることだ。土地の伝えによると、頭巾をかぶった踊り子は、盆に戻ってきた亡者を表わすという。ふつう盆踊りといえは、村人たちが亡くなった村の先祖を慰めるために踊るものだと解釈されるが、各地の習俗をしらべると、むしろそうした亡者自身が出る形のほうがいちだん古いものであったことがわかる。しかも、それ以外に、間近に控えた稲の収穫を祈願する意味や、村にたたりをする悪霊を追い払う目的などをも、古い盆踊りはもっていた。

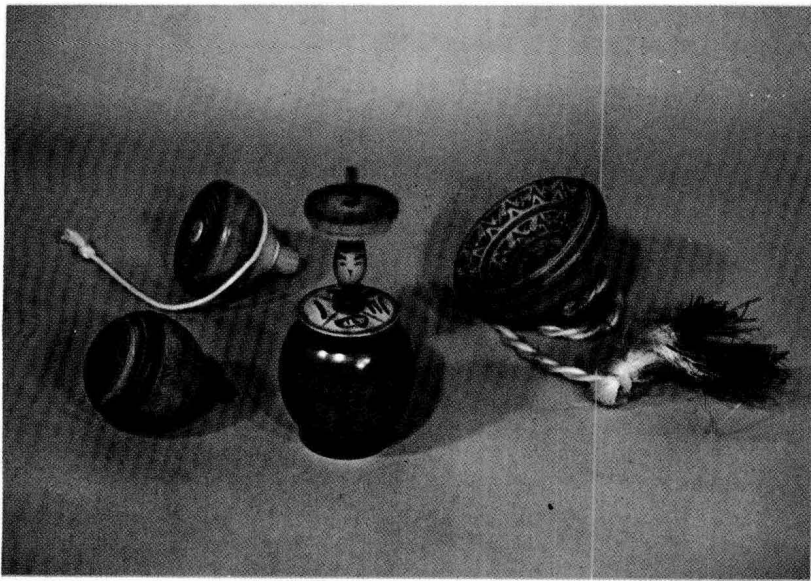
冬の芸能 十月ごろから十二月にかけての芸能暦をつくってみると、この時期、神楽が集中して行なわれることがわかる。中でも注目に値するのが、「霜月神楽」「湯立神楽」と呼ばれる神楽で、シートの最後に収めた「遠山祭り（遠山の霜月神楽とも）」などはその代表的な例だ。

この遠山祭りは長野県の南端の俗に遠山と呼ばれる地方（下伊那郡上村・木沢村・南信濃村）に分布する祭りの一つで、例年十一月（もとは十一月）、部落の氏神をまつる社殿の土間に籠を築き、そこへ釜を据えて湯をたぎらせ、村の神主・禰宜たちが湯はくと称する幣を持って、湯を神々に献じたり、神の息吹きのかかるその湯をはねあげたりする。また祭りの後半に、さまざまな飯面をつけた神々が祭場に出て、湯をまわりの群衆にあびせたり、反問を踏んだりする。湯を群衆にあびせかけるのは、神の息のかかった神聖な湯を人々の体につけて、その人々の魂を復活させようとの意図に出たことで、また神に扮した者が反問を踏む（地面を特殊な足取りで踏む）のは、下地にひそむ悪気を退散させ、代わりに正気を呼びさませうとする呪術であった。いまではこうした行為も人々の理解の外に出るようになったが、昔は、この呪法を受けることによってはじめて人の魂が蘇生し、村の生活が改まると考えられた。

人々が、以前、この「ふゆ」の祭りをすまざねば、たとえ一月になろうと新春を迎えた気分にならぬといったのは、そうした理由からであった。冬の神楽はいわば「はるを呼ぶ祭り」であり、これもまた「春のことぶれ」であった。



梯子虎舞 (岩手県陸前高田市根岬 萩原秀三郎)



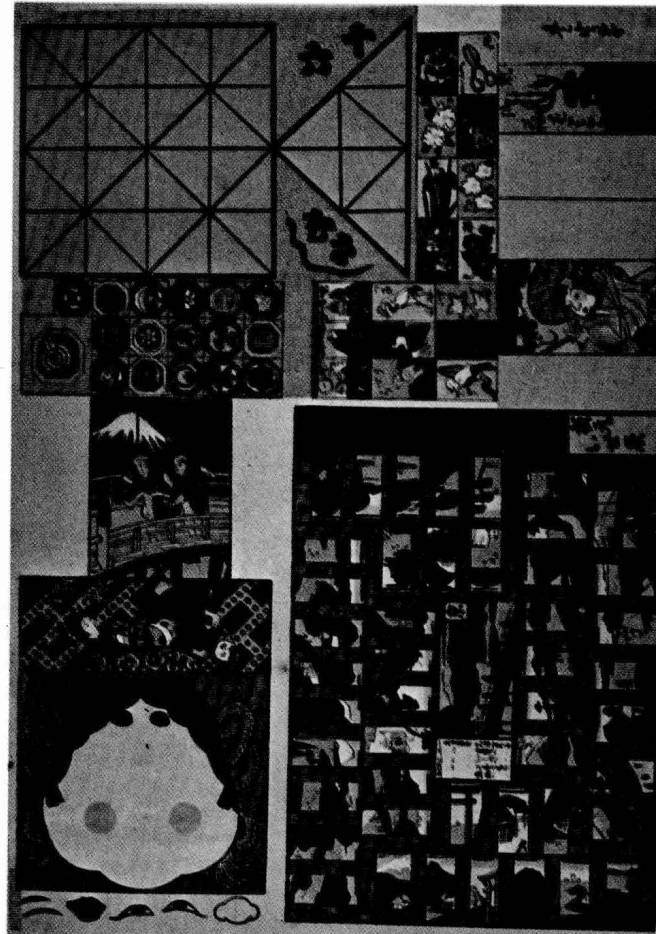
独楽



十六むさし (歌川国彦)



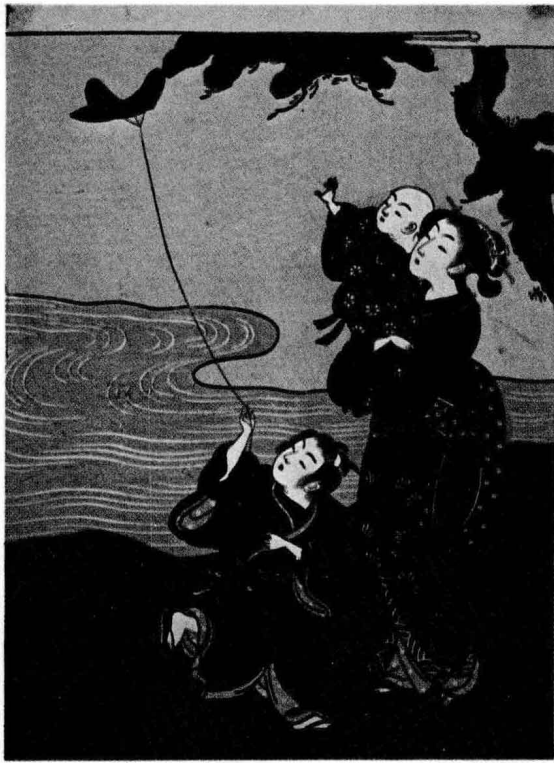
福笑い



道中双六・福笑い



手紙 (菊川英山)



鳶凧 (磯田湖龍齋)



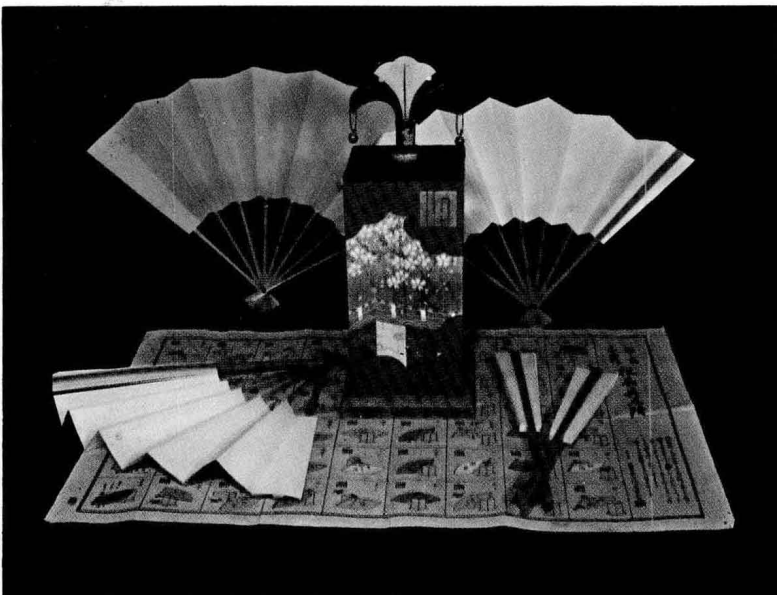
春駒



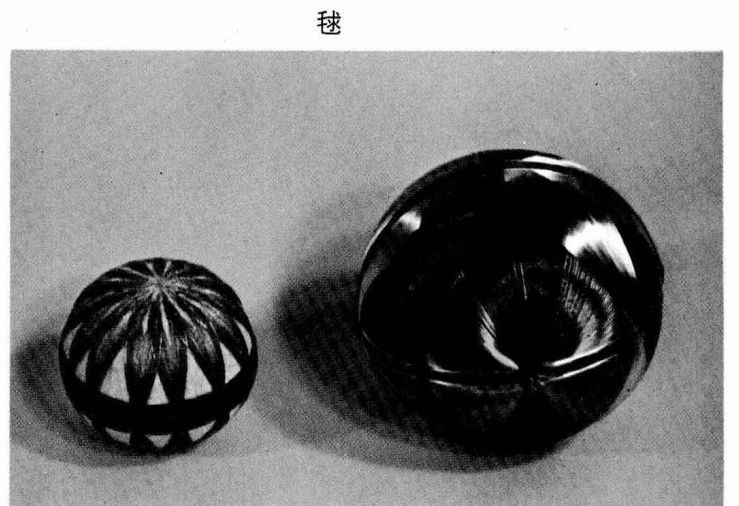
押し絵羽子板



繭玉



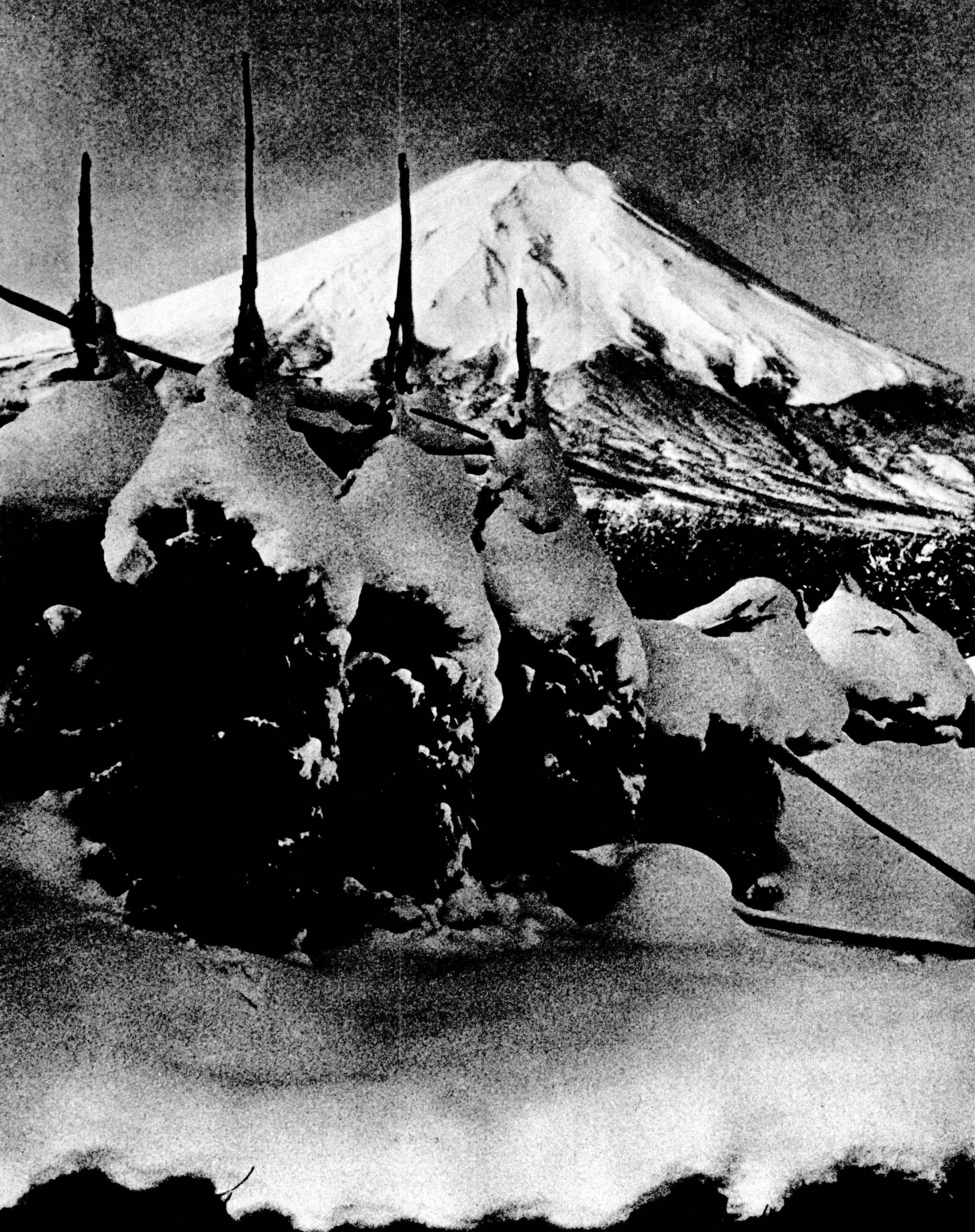
投扇興



毬



小正月の鳥追い（新潟県小千谷市塩殿 芳賀日出男





秋田万歳（秋田県横手市内）

初便り（新潟県北魚沼郡小出町）





若井 (京都市嵐山)





昭和三十三年
鉦金乃比羅宮

鉦金乃比羅宮

奇進

奇進



雪中真田植 (秋田県平鹿郡平鹿町)



田遊び (東京都板橋区徳丸本町)